●発行・編集 全道美術協会事務局 川本ヤスヒロ方 TEL0133-73-7315 〒061-3202 石狩市花川南2条2丁目121●HP http://www.zendouten.jp●印刷 株式会社アイワード

ZEN 全道展交流紙 2016.3 短信No.51

2016年を個・群・奮闘の年に

―第71回全道展に向けて―

全道美術協会事務局長
川本ヤスヒロ

全道展交流紙「ZEN」を年2回発行

2016年1月、新年を迎え全道展事務局は早速、71回展に向けて準備を開始している。まず昨年までは年1回、8月発行の「ZEN」を今年から年2回、3月に発行し一般出品者にも渡るようにした。全道展交流紙として重要な役割を果してきた「ZEN」を、情報共有のツールとして更に有効に利活用していただきたい。

作品が主役の展示会場、昨年に続き改善を

70周年記念展の会場は大変見やすかった、と好評であった。絵画部門は特に陳列委員長を中心に展示全般のキメ細かい工夫があり1、2階とも整然とした印象になった。今年も2階の一般出品者と会友の壁面構成に、より改善の余地がありそうだ。努力して行きたい。

しかし何より主役は作品である。全部門を通して私達一人ひとりが確りと自分の内面に向き合い、制作意欲を最大限に表出した作品を出品したい。たとえそれが失敗作であろうと恐れずに挑戦する、プラス思考はとても大切なことなのである。

23歳以下の出品者に朗報（出品料半額、入場料無料）

若い世代の人達にとって出品費用の捻出は切実な問題で出品したくても断念せざるを得ない、という事例をクリアするため23歳以下は従来の出品料8000円を半額に、更には入場料も無料とした。今年の71回展から適用するので若い人達は、ぜひ一人でも多く出品し会場にも足を運んでほしいと思う。

全道展は1960年に北海道新聞社とともに「学生美術全道展」を創設し、そこから多くの作家を輩出してきた。学生展での受賞者が全道展にチャレンジし入選、受賞というケースも今では珍しいことでなくなってきた。

〝個〟の活躍に期待

全道展の根幹を成すのはやはり作品本位ということで、創立展以来それぞれの個性溢れる作品の展覧会に最も魅力を感じる。その意味でも昨年の記念企画展について語った美術ジャーナリスト、村田真氏の批評（北海道新聞掲載）はあまり該当しないのではないか、と思う。

私達は今という時代を背景としながらも個々人が自分なりのテーマ（モチーフ）を持ち日々、制作に励んでいる。様々な表現で決して倦むことなく頑張っている〝個〟の集まりが全道展だと言っていい。そのような存在感のある作家が全道展を支えている限り、バトンは繋がって行くものであろう。

昨年の70周年記念企画展のキャッチフレーズ―新生する全道展―が試されるのは本当にこれからだ、と私は強く思っているところだ。

2016年　元旦

カット　山本美沙

特 集

全道展 70 周年記念企画展 会員・会友展を終えて

新生する全道展 ― 今後に手応えの予感 ―

近代美術館前の看板

昨年、創立 70 周年の大きな節目を迎えた全道展。会員・会友 245 名の作品が展示された会場には期間中、4236 名の来場者があり盛会のうちに終了した。

また、同時期に市内の個人画廊喫茶で全道展創立会員・物故作家作品展が開かれるなど、全道展新旧作家の作品を再認識する機会ともなった。一連の諸行事を振り返り、梅津薫会員(絵画)に総括をお願いした。

●初めに

同展は川本ヤスヒロ実行委員長（現事務局長）の指揮のもと、北海道立近代美術館において 2015 年 10 月 31 日㈯～11 月 8 日㈰の 9 日間、全道美術協会と北海道新聞社の主催、道銀文化財団様、道銀芸術文化助成事業様の助成により開催されました。以下ご報告します。

※ 11 月 2 日㈪は特別開館

●陳列と懇親会

10 月 30 日㈮午前 9：00 から展示会場のパネル移動、作品搬入が開始されたが、パネルは現状使用できる状態であったので、作品搬入がスムーズにできた。陳列作業の参加者は会員 82 名、会友 61 名の計 143 名。展示会場はＡ～Ｅのブロックにわけ、各室陳列チーフのもとに作品位置が決められた。参加者も多く、また手慣れたベテランばかりで 16：00 前には終了した。18：00 から全日空ホテルで会員・会友ご苦労さん懇親会が行われた。宴会の中で、オープン初日に行う演劇の出演者が「台詞のワンフレーズ」を披露して盛り上り、幸先のよいスタートとなった。

講演する村田真氏

●会場風景

初日オープンの 9：30 には多くの観覧者たちが訪れた。Ａ室はＦ 100 号縦の絵画がびっしりと奥まで並び息苦しいほどで、強烈な個性の壁画群と彫刻作品で圧巻。Ｂ室からは空間も広がり、中品もありちょっと一息つける空間。Ｃ室は工芸と版画の清々しい空間。Ｄ室は天井も高く、彫刻作品も収まりのよい圧倒的な空間。Ｅ室は中、小品ではあるが充実した内容であった。出口には有志による絵葉書やカレンダー 2 種、70 周年記念展図録などが販売され、好評であった。

※基本的な考え方は 2 段掛けをなくし、会員、会友を横並びに陳列することであった。が、結果的には 14 か所で 2 段掛けとなってしまったことは残念である。

気をつけて―陳列に汗を流す

陳列後の懇親会で盛り上がる

近代美術館を訪れるお客様

可愛いお客様たち「こっちも見ようよ」

一般者からの感想

その１　「どの作品も自信満々、自分を主張しているのがスゴイ！」

その２　「独創的で想像力が豊かな作品が多い。どんな気持ちで作ったのか興味が湧く」

その３　「本展（６月）よりも見やすく自由で伸び伸びとしていて良かった」は印象的であり、示唆的である。このことは全部門に当てはまるが、特に彫刻部門は各室に分散できたおかげでとても生き生きとしていたという私的感想と符合する。

●講演と演劇

初日は13：00から同館講堂において「道新朝刊ウェーヴ美術」の村田真氏の「公募団体の光と影」が講演され、240席が埋め尽くされた。講演後の質疑応答も予定時間をオーバーして打ち切るほどの熱気があった。次の演劇が予定されていなかったら、まだ続いていたに違いない。

次に続く会員による演劇「アートは時空を超えて」（会員渡辺貞之作・演出と同会員17名出演）は立ち見が出るほど。キャラクターもピッタリで、熱演による爆笑と感動？の連続。ロダン、ゴッホ、藤田、セザンヌ、ダリ等々を取り巻く女性陣の演技は圧巻であった。この場に立ち会えた人々は幸いである……と思わずにいられない。

勢揃いした役者（？）たち

●入場者数

11月8日㈰最終日の13：25頃、4000人目の入場者があり、記念品として今回の「2016年全道展オリジナルカレンダー」２種類と、小冊子が川本事務局長から手渡された。

●最後に

会期中は天候にも恵まれ多くの方々に御観覧いただき、厚く御礼申し上げます。全道展の会員・会友一丸となった本展の展示は、間違いなく将来を見つめて前進し始めていることを我々一同、そして観覧者、並びに関係者の皆様と共有できたことを重ねがさね、感謝申し上げます。

70周年記念企画展実行委員会
副委員長　梅津　薫

全道展（公募団体）に対する意識のあり様を含め、現況を冷静に捉えておくことは今後の課題に対応するうえで、とても重要になってくるのではないか。

講演の演題に寄せる関心の高さもあり、質疑応答での熱の入ったやり取りは時間切れになる程であった。

質問に立った一人、渡会純价会員（版画）に今回のテーマについて見解の一端を寄稿してもらった。

全道展 疑問符

渡会　純价

過日北海道新聞にも書いたが、これは公の視点で公募展のあり方にとどめた。本稿は見識ある全道展関係諸氏に伝えたく筆を執った。

道新のコラムニスト村田真氏の書いた文言は全道展の沽券に関わることなので項目毎に弁明しておきたい。

第一の狭隘な会場に作品をギュー詰めするのか、とのことだが、今日の公募団体を知る人は現況との兼ね合いからすると止むを得ない事情にある。広い会場でゆったりと観賞できるに超したことはないし、全国的にみてもその実体は語るまでもない。

第二は額縁不用論である。額縁は作品の一部であり額縁を不用とする作品もある。要は衣装をまとわない人間と同じで、ファッションの有無で作品の存在感は違ってくる。

第三に作品が現代社会を反映していないのかとの指摘である。創作活動というものは千差万別であり、当然現代世相を見詰め、その内奥に迫る作品もいくつかあった。作家は一元的発想で制作している訳ではなく、個々人の生い立ち、人生から発したテーマは珠玉である。長年、美神を求め死にもの狂いで取り組んでいる作家も大勢いることを忘れてはいまいか！

最後に群れ集う必要が何故かという。先にも書いたが公募展はひとつの修行の場である。お互いに切磋琢磨して挑戦している、その交歓が人生を育むことになる。人間にはこの様な道場が必要不可欠である。

公募展にも功罪はあるが致し方ない。これからの若い世代の人たちが、長い歴史の中に悪弊があるならば思い切り断ち切り、望ましい公募展に変遷していただきたい。

（第５代事務局長）

全道展 東西南北　地区だより

全道展は札幌及び近郊在住作家以外にも東京をはじめ、道内6地域（函館・室蘭・苫小牧・釧路・旭川・帯広の各市及び周辺）に在住する作家達がおり連帯感や人的交流を図りながら、活動の主軸である地区展を定期的に開催し続けている。
これまで会報に掲載してきた地区活動状況は、今年からは「ZEN」で取り上げ一般出品者にも配付される。4地区会からは、様々な課題を抱えての活動報告が寄せられた。

2015年全道展道東地区展開催報告
―道東の力を発信する場―

釧路地区会事務局　森川ヒロシ（文責）

8月、地区展搬入日前の月曜日。釧路は記録的な大雨にみまわれました。雷鳴が響き渡り2千戸もの家屋が停電しました。また、釧路でも大きな商業施設であるイオン桂木店も一階部分が浸水し午前中で営業を終わるという事態でした。国道など路肩がゆるむ中で根室地区、オホーツク地区の方々が無事搬入に来られるか心配しておりました。11日火曜日みんな搬入に集まることができ本当に良かった。

メンバーの良い笑顔

そうした中で今年度も、8月12日㈬～8月16日㈰の5日間、釧路市生涯学習センター1階市民展示ホールを会場に道東地区展を開催することができました。道東地区の会員・会友そして一般入選者の作品23点と小品9点を展示し来場者の目と心を楽しませることができました。5日間の観覧者数は950名。例年並みではありますが、多くの方々に観ていただくことができました。今年度大きな節目を迎えた全道展。厳しい審査を乗り越えて入選を果たした作品の数々。根室の宇佐美さんは150号もの大作。本展でも第2室入り口に展示され地区展でも迫力ある画面に来場者も見入っておりました。また、同じく根室の柏崎さんは作風を変え大いなる探究心を見せてくれ、地区展の仲間へ刺激を与えてくれました。そして今回、奨励賞を受賞した加藤さん、新会友の岡野さん、道東の力を大きく発信してくれました。今後も互いに切磋琢磨し全道展の歩みと共に道東の芸術文化の振興に少なからず寄与することができるよう、自らの研鑽に励みたいと思います。

2016年　函館地区展開催
―鎌田俳捺子先生の遺作を展示―

函館地区会事務局　安井　　孝（文責）

全道展第17回函館地区展が新春1月19日㈫から25日㈪まで函館市芸術ホールギャラリーで開催されました。現在、当地区の全道展所属会員・会友・一般出品者は合計54人。今回展の出品は一人一点で50点でした。一昨年の暮れまでお元気で会務委員として常に指導的存在にあった鎌田俳捺子会員が昨年9月にご逝去され、地区展にとっても大きな悲しみとなってしまいました。遺作を展示し先生の功績を偲ぶとともに、創作への互いの決意を高め合っていきたいと思っています。

昨年の70周年記念展で近年では最も多い6人の受賞者と初入選5人の作品をメインに道南の創意に富んだ元気いっぱいの作品が展示され賑やかな会場となりました。

道南地区は全道展出品者が多いと思います。函館には昨年10月に市内ボーニ森屋デパートで第92回公募美術展を開催した赤光社美術協会があります。この赤光展で活躍した画家たちが全道展の創立に係わったり出品して、注目される画家が多数生まれました。美術を目指す者は自然に赤光社展・全道展へ出品するという流れがありました。こんな状況が今、変わりつつあります。

近年、次々と絵画・彫刻部門で若手出品者を送り出してきた教育大学函館校の美術教員養成課程が数年前から岩見沢校に移転したために美術専門の指導者と学生がいなくなるという深刻な問題が起きています。今後、若手作家の養成が大きな課題です。

展覧会の運営は全道展から支給される地区活動費5万円、出品者負担金7千円、入場料5百円、広告料7万円で賄われています。例年、入場者約9百人、有料入場者約2百5十人。何とか赤字にならず続いています。

陳列と総会を終えた会場で

展覧会会場

第19回十勝地区展報告と「第20回全道展十勝地区展」神田日勝記念美術館で開催

十勝地区会代表　齊藤　隆博

昨年、猛暑の中第19回全道展十勝地区展（8月6日～11日）を開催、会員、会友、一般の計24名が58点の力作を展示し期間中約640名の来場者があった。出品者が減少傾向にもかかわらず今回の初出品に絵画・津崎千亜紀と彫刻・川橋雪弘の2名があり、特に彫刻は十数年ぶりの快挙で奨励賞佐藤真康を含め十勝地区の前途に明るい兆しと思っている。制作者の生活の経験値や心の葛藤、人生の見えない部分を投影した作品は社会的メッセージ性もあり刺激的で熱気溢れる会場であった。

さて、十勝地区展は全道展巡回展が終了した時に会員が中心となり立ち上げたが当初の会場は帯広百年記念館の2階だった。狭くて皆、汗だくで陳列した思い出がある。会員も少なく大変だったが現在は会員9名、会友6名に一般出品者を加え25名程になった。会場は帯広駅地下に新装なった帯広市民ギャラリーで、空調施設も整った広い会場に展示できることは最高の幸せである。

そして節目の今年、第20回全道展十勝地区展は鹿追町のご理解とご協力を頂き、神田日勝記念美術館の全館を使用し11月8日㈫～13日㈰に開催する。地区の先輩、神田日勝の記念館で実施することに深い縁を感じるとともに今、十勝地区は各々の良さを生かしながら〝個〟の輝きで、一層前進する展覧会にしたいと準備を進めている。

神田日勝記念美術館長　菅訓章（すがのりあき）さんを悼む

あまりに早い旅立ちの訃報であった。今秋開催の全道展十勝地区展を楽しみにしていてくれた菅館長が1月12日、65歳の若さで亡くなった。神田日勝の名と作品を全国に広め、個人名を冠した地方美術館の名物館長として活躍された。優れた企画展等でお世話になった全道展関係者も少なくない。心から哀悼の意を表したい。

第71回全道展

会期2016年6月15日㈬～6月26日㈰

◆札幌市民ギャラリー（月曜休館）

全道展を担う有能な若い作家を育てなければ……

室蘭地区会代表　矢元　政行

室蘭地区は室蘭市と胆振中・西部（登別市、伊達市、壮瞥町、洞爺湖町、豊浦町）で絵画、版画、工芸の各部門（彫刻は不在）から会員13名、会友5名、一般12名の30名ほどで活動している。展覧会会場の室蘭市民美術館の館長に絵画会員の工藤善蔵氏が就任しており、地域の芸術・文化を考え企画を整えてくれている。昨年は全道展創立70年、室蘭地区展もそれに合わせ企画を、と考えていたが市民美術館が耐震改修工事で半年間閉館になり、残念だが開催することができなかった。ただ室蘭地区の交流、懇親会は毎年欠かさず続けており、昨年も佳作賞・神原利樹（洞爺湖町）、柏木レイ（登別市）と中澤文隆（同市）が初入選、出席した20名が3名を祝った。自らの作品や制作の悩み、審査についてなどそれぞれの思いを語り内容のある充実した時間であった。

現在の公募展は全国、地方を問わず一様にその存在意義に大きな課題を抱えている。会員の高齢化と出品者の減少、特に若い作家が出品して来ないことが最も大きい要因だ。彼等は組織に入るよりも自由に活動したい、筆とキャンバスなどの平面的な絵画手法よりも現代アートに魅力を感じるなどが主な理由かと思うが、若者が公募展を認識するための抜本的な解決策や打開策がなかなか見つからず、歯がゆい思いで悶々としているところだ。

私がこの室蘭で活動を始めたのは1980年代、まだ20代の頃だ。室蘭は新日鉄、日本製鋼所の企業城下町として賑わい発展し、活気があった。当時の全道展室蘭地区は会員、会友そして出品者も多く、全道展の中でも大きな力を発揮していた。皆、分け隔てなく酒を飲みながら絵画論や作家について熱く語りあったものだった。

鉄冷え、斜陽の町、室蘭だがこの地で次の全道展を担う有能な若い作家を育て、伸ばしていくことが使命と考えている。そして今年は全道展室蘭地区展を開催したいと思っている。

各会場ホームページ

釧路市生涯学習センター
www.kushiro-bunka.or.jp/manabo/

函館市芸術ホール
www.zaidan-hakodate.com/gjh/geijyutu/

帯広市民ギャラリー
www.city.obihiro.hokkaido.jp

室蘭市民美術館
www.city.muroran.lg.jp

全道展　充実のホームページ

会員、会友の個展やグループ展情報を常に更新！

http://www.Zendouten.jp

第17回　あの日　あの時

カット　本城義雄

出会いと別れに

〔絵画〕髙橋　靖子＝江別市

時計台ギャラリーでの
グループ展
自作に加筆中の私です。

今日の夕方6時より一つの通夜がある。それは突然の事故により義弟が亡くなったのであるがつい数日前に義弟より電話があり色々と話し合ったばかりであり到底受け入れられるものでは無い。義弟は私の妹の連れ合いであるが、すでに妹は他界して居り今現在は一人住まいであった。元々病弱であった妹を多年に渡り看護して呉れた心優しい人であり私にとっては大切な恩人でもあった。最後になってしまった電話の声が妙に弱々しく寂し気であった事が気になっていた矢先の事でもあり、まさか自殺ではないかと胸が詰まった。義弟は夕方の散歩に出た帰り道に人通りの無い街灯も無い所で転倒、意識を失いそのまま還らぬ人となったと言う事である。今時期は陽の入りが早く朝は7時過ぎに陽が昇りようやく明るくなる。早朝発見される迄の間の事を思うとこれも一つの孤独死ではないか、わずかな意識の中で何を思ったであろうか、底無しの孤独と恐怖心であったのではないだろうか。

よくもこうして生き長らえて来た私にも、その分だけの人との出会いと別離もあり生き物たちとの出会いも数多くある。今年の5月末に出会ったと言うかこの掌に載せてしまった仔猫のこともこれも立派な出会いである。こ汚い毛色と言い今迄に見たことも無い不細工な顔つきと言い見合った瞬間、ああこの仔は私が育てるしか無いのだと決断。生きようと必死にもがく生後間もない仔猫、私ときたら睡眠不足と疲労困ぱいでふらふらである。何よりも絵を描かなければならない、いや描きたいのに描けない。言いたくないけれど私も歳であり体力はガタ落ち、この先を考えると後悔しきりである。それでも半年も過ぎて見れば不細工猫も立派な熟女に成長しぐりぐり目玉も野性むき出しで我が家に君臨している。

2015年12月

雑感―若き画家に―

〔絵画〕佐々木　治＝滝川市

富良野での一枚

先日、20代の若き画家と酒を酌み交わしながら話をした時、彼は〝絵は明るく判りやすく、なおかつ売れなければいけない〟と明快に言い切りました。

私の20代の頃は、絵とは何かも判らず、ただ闇雲に描きなぐっていたものでした。様々の美術評論を読み漁り、画集や実際の作品をいくら観ても絵とは何か、の確信も持てず、ただ絵は百人百様の考え方、描き方があることだけは何となく判ったように思いました。

そんな多様性こそが絵画表現の1番の魅力なのではないか。肩肘はらず描きたいものを描きたいように描く。ひょっとしたら、それが私の絵画表現の原点なのかもしれません。

ひるがえって、若き画家よ。君の言う明るく判りやすい絵とは何なのだろう？　多くの絵描きは、その心のうちの1番深いところに闇みたいなものを抱えていて、そこから言葉にして発し得ないものが、画想となって起ち上がってくるのではないだろうか。

絵画表現がそのようなものであるならば、それは単純で判りやすいものではないはず。そして明るくハッピーな絵などあまりにも軽く、多くの鑑賞に耐えるものにはなり得ないのではないだろうか。

君の絵もまた、表面的に明るく見えても、その奥には生きる悲しみみたいなものが流れているように。

それにしても若き画家よ、いまだ売れない年老いた画家ですが、時間はまだ少しありますから、また刺激的な会話に誘ってください。心の戸はいつも、開けておきますので。

ART STAGE
―作 家 の 痕 跡―

田崎謙一会員

田崎謙一個展（1969～2015）から

2015年10月1日～15日
深川市アートホール東洲館で開催

深川市アートホール東洲館館長
全道美術協会会員　渡辺　貞之

アートホール東洲館展示会場

「人間はどこから来て、どこへ行くのか……」昔から多くの芸術家が追求し続けてきた、壮大にして深遠なテーマに田崎謙一は挑もうとしている。それが彼の半生かけてなぞり続けたテーマであることが、この度の個展で明らかになった。

「人はなぜ生きているのか。そういうことが僕にとっては大きな興味であり、謎なんだ。僕は自分の意志で生まれたわけでもなく、それなのに自分の意志とは無関係に運命というものが一生ついて回る。だから、それが結局自分が何者かということへの問いかけになったり、疑問になったりするんだ。僕はどうせ絵描きとして生きていくなら、そういうことをテーマにして探っていきたい……。」

飲むほどに酔うほどに彼は幾度も語る。

田崎謙一は一貫して人物を描く。卓越した描写力を秘めながら群像を、あるいはコンピューターを駆使して、多様にねじ曲げた胎児と見紛う形を探り出す。そこには人間の苦悩や煩悩、さらに孤独の影が深く刻まれ生きていることへの祈りや希求が込められている。だからどの人物にも、包み込むような魂の奥深さを感じる。彼の絵を見ていると「人間である前に魂がある」そんな言葉が自然と浮かんでくる。

田崎謙一は人物に表情をつけようとしない。大抵、目を閉じていたり、俯いていたり、影に覆われたりする。具体的な表情を排することで、逆に見る者にその人物が語り始める。「絵という形を借りて自分の言葉にならないメッセージを表現したいと思っている。僕にとって絵を描く行為は生きて行くこと自体を意味する」と……。

さらにモチーフの内面性を象徴するかのような色合い。瞑想的で静謐な背景。田崎は「時間と空間を表現したい」と語る。すり込むように描かれ、微妙なニュアンスを持つ背景には東洋的な広がりと時間の奥行きのある夢幻的な（あるいは無限的な）空間を表す。

田崎謙一は他人の絵に厳しい。それなのに古典の作家には絶大な賞賛を示す。彼は何を見ているのか、あるいは見ようとしているのか私には戸惑いだった。しかし、この壮大な作品群を見せられて、田崎謙一という画家が何を求め、何を探しているのかがわかった。

個展には、現在の作家仕事ぶりをみせるものと、作家の半生を顧みるものとがある。後者の迷いながらもなお歩み続ける作家の生き様を垣間見ることは、同じ仕事をする者にとっては非常に興味あるものだ。

深川市
アートホール東洲館
ART HALL TOSHU-KAN
〒074-0001　深川市1条9番19号　深川市経済センター2階
Eメールアドレス　bz649093@bz01.plala.or.jp

TOPIC プラス I

全道展事務局
4部長交替で新たなスタート

任期満了に伴い全道展事務局の4名の部長が交替（会計部長は1昨年交替）した。今後3年間、円滑な運営を行う任務に就く新しい顔ぶれを紹介する。

（事業部長）富田知子

個のエネルギーをそれぞれの作品に込めて、いい71回展の会場にしましょう。そのために事業部として精一杯、頑張って行きたい。体力が続く事を願いながら。

（庶務部長）佐藤仁敬

ネットでの広報は無料。展覧会告知の更新など開拓の可能性が大きい。理想は会報、ZEN、諸連絡もネット上で！　作業量、経費削減の実現！　でも現実は会報を1部ずつ手で折り続ける3年間。頑張ります。

（企画部長）韮沢淳一

前企画部長の阿部さんから、たすきを引き継ぐことになりました。痒いところに手が届く、そんな運営を心がけて行こうと考えています。

（次長・会計部長）吉川勝久

会計部の仕事は、全道展の「財布」の〝番〟です。出納実務の他に今大切なのは、健全財政の維持です。そのためにも71回展は総力を挙げて成功させましょう。

第57回学生美術全道展
ヤングパワー全開！
2015年10月3日～7日開催

大学生、高校生らを対象に半世紀以上の歴史を重ねてきた学生美術全道展。4部門（絵画、版画、彫刻、工芸）の応募総数292点中、入賞、入選は248点であった。審査委員長を務めた小笠原実好会員（絵画）も「現代社会に鋭く反応する感性に驚く」と講評したように近年の学生達の表現力には瞠目するものがあり、将来が楽しみだ。会場の札幌市民ギャラリーでは10月4日、表彰式に続き梅津薫会員による「絵の具について」と題したミニ講座や実技もあり、学生達は熱心に聞き入っていた。

表彰式で挨拶する秋本結以さん
（全道美術協会賞受賞）

第5回新鋭展
大同ギャラリーでは最後
2015年10月29日～11月3日開催

70周年記念賞や佳作賞など各部門の受賞者23名が出品しての新鋭展が開かれた。多彩な作品が並ぶ会場に期間中約700名の来場者があった。初日は出品者によるミニトークがあり、少し緊張気味の作品解説に出席した会員達から講評や次作への期待が述べられるなど、有意義な展覧会となった。大同ギャラリーは3月で閉鎖され第6回展の会場は大通美術館での開催となる。

自作を説明する若い受賞者

デュボア康子さん追悼展
色彩を永遠のテーマとして
2015年8月3日～8日

3月に逝去したデュボア康子さんを偲び追悼展が開かれた。画家仲間13名の呼びかけで会場の時計台ギャラリーには滞仏中の作から絶筆となった2014年までの作、30点余りが展示された。鮮やかな色彩と躍動感溢れる油彩画で全道展や独立展など、多くの展覧会で活躍し心の底から芸術を愛した女性（ひと）だった。初日には親交を結んだ多くの人達が会場を訪れ、66歳の若さで逝った作家との早過ぎる別れを惜しんだ。

追悼の辞を述べる輪島進一会員

● 編集後記 ●

戦後70年と歩を同じく、昨年創立70周年記念展を終えた全道展。ZENの編集作業で一番心がけるのはバランスだ。部門、地域、性別等に偏重が出ないように、情報発信紙は風通しの良いものでありたい。全道展の人と人を繋ぐ、潤滑油の役目がこの冊子のポリシーです。

〈石本・川名・米澤（文責）〉